

玉野高の3年生が市をテーマに取り組む探究活動の実践報告会が22日、同高で初めて開かれた。社会・経済系、家政・生活系

など8分野の代表が、外国人観光客への対応や海ごみ問題など、地域の課題と向き合った研究成果を披露した。（松山定道）

キャッシュレス決済、海ごみ有効活用…

玉野高生が地域に提言

露された発表会
高校生の視点で地域課題と向き合った探究活動の成果が披



社会・経済系グループは「高校生から広がる玉野市の未来」と題して、外国人観光客にとって宇野港が通過点になっている現状について研究を進めた。市を訪れた人へのインタビューなどを基に「外国人の多くは現金を使いたくない」と指摘し、市内のすべての店にキャッシュレス決済サービスを導入するとともに、高校生によるイベントを開催するよう提言した。

家政・生活系グループは「海のゴミから作るシーランプ」を提案。沖縄県でサンゴを使ったシーランプが人気となっている事例を参考に、渋川海岸で拾ったガラスや貝殻をランプシェードにするこ

市8分野 初の探究活動報告会

とで美化活動と土産物作りが両立できると訴えた。

同グループの大塚杏奈さん(17)は「渋川海岸のごみをただ拾うだけでなく、有効活用できれば。市民が誇れる市をつくりたい」と話した。

発表は全校生徒443人のほか、市や企業の関係者も参観。大橋和正・山陽学園大地域マネジメント学部長が「まず生活の中で疑問に思っていることをやってみることが大切。習った知識をつなぎ合わせ、問題解決にチャレンジしていくことがこれからは必要になってくる」と講評した。

探究活動は、地域に根差した学校づくりの取り組みとして、現3年生152人が昨年9月に着手。希望進路別に3、6人のグループをつくって進め、今回の報告会では3月の中間報告で各分野から選ばれた8グループが発表した。

(C) 山陽新聞社 無断複製・転載を禁じます。